

## たれ踏みそめて恋の道

——「恋重荷」の恋の歌——

岩崎雅彦

世阿弥作の能「恋重荷」は、老人の恋と恨みを主題とする名作である。女御(ツレ)に恋をした老人(前シテ)が、重荷を持つように命じられるが、持つことができずに死に、死後に鬼(後シテ)となって現れ、女御を責める。人間が持つ恨みの感情の恐ろしさを鬼という形で描くのが怨霊の鬼の能である。

しかし「恋重荷」は、ただ恐ろしいだけの作品ではない。全編にわたって恋の和歌が数多く散りばめられており、その雅びな雰囲気と言語遊戯の面白さが、深刻な内容を中和させる絶妙なはたらきを果たしている。

「恋重荷」の構想は、『古今集』雑躰・誹諧歌(二〇五八番)の読み人知らずの歌

人恋ふることを重荷とになひ持て

会ふ期なきこそわびしかりけれ

を踏まえる。この歌では、恋の苦しみを重荷を持つつらさに例え、「会ふ期」と重荷を担う「杖」(担い棒)を掛詞としている。恋のつらさを重荷に例える和歌の表現に発想を得て、実物の重荷を作って持たせる点が能「恋重荷」

の独創的な工夫である。なお「恋の重荷」という言葉はこれ以前に用例が見いだせず、世阿弥の創案になるものようである。

〔次第〕の

重荷なりとも逢ふまでの、恋の持夫にならうよ

に見える「恋の持夫」は、『狭衣物語』に用例があることが『謡曲大観』に指摘されている。他には、源俊頼『散木奇歌集』(二〇五一番)に次の歌がある。

夜とともに苦しむものを思ふかな

恋の持夫となれる身なれば

この「恋の持夫」は用例が非常に少ない言葉である。この言葉も「恋の重荷」と同じく、恋のつらさを重荷を持つ人夫の苦しさに例えている。恋の持夫は物語や和歌では、なろうと思つてなるものではなく、本意にもいつの間にか、なつてしまうものである。これに対し「恋重荷」では、老人が実際に荷を持ち、自ら進んで恋の持夫になろうとする。これも恋の重荷の実物化と同じく、和歌の比喩表現を

実際に演じて見せる能独自の趣向である。

「恋の持夫にならうよ」というのは、「時の鼓を打たうよ」(綾鼓)、「出汐をいざや汲まうよ」(松風)、「いざいざ衣打たうよ」(砧)などと同じく、労働を舞台上の演技として見せる場面に使われる類型的表現である。「恋重荷」では、「重荷を持たうよ」というような単純で直截的な所作の表現ではなく、「恋の持夫」という珍しい比喩を使って印象的な表現をしているところが特徴と言える。

〔一七セイ〕の

たれ踏みそめて恋の道、ちまたに人の迷ふらん

は、恋に迷うことを道に迷うことに例えた表現である。ここでは「いったい誰が最初に恋などということをし始めて、それ以来多くの人が恋に迷うことになったのだろう」と、最初に恋をし始めた人を恨んでいる。

「恋の道(を)踏みそむ」という表現は、和歌に多く用例があるが、能「恋重荷」の場合とは違い、作者自身が恋をし始めるという意味で使われるのが基本である。たとえば『藤原隆信集』(五八八番)の

恋の道心にもあらず踏みそめて

くやしとのみぞ思ひ知りぬる

や、『文保百首』(一九六八番)の源有忠の歌

恋の山入りて苦しき道ぞとは

踏みそめてこそ思ひ知りぬれ  
また『南朝五百番歌合』(六一四番)の阿野実為の歌

まだ知らぬ恋の道しば踏みそめて

迷ふ心をたれに問はまし

など、いずれも作者自身が恋をする意味で使われている。「踏みそめて」の語が「恋重荷」と同じような意味で使われている用例としては、わずかに次の『西園寺実材母集』(六一一番)の歌を見いだすのみである。

恋の道たれ踏みそめて昔より

入りては迷ふならひなるらん

この歌は「恋重荷」と語句が共通する部分が多も多く、歌意もほぼ同じである。多くの作者は「恋の道(を)踏みそめて」自分が恋をしてしまったことを悔いる。一方この歌では、誰が最初に恋をし始めたのかという表現で、恋をして悩むのは人が持つ普遍的で厄介な性質であるということ客観的な視点から捉えている。この和歌と共通する「恋重荷」の「たれ踏みそめて」という表現が、かなり特異なものであったことがわかる。

この歌の作者、西園寺実材の母は、初め平親清の妻となり、後に西園寺公経(一一七一一―一二四四)の妾となって実材(一二二九―六七)を生んだ。そしてこの人は、もと白拍子であった。白拍子は恋の歌を歌いながら舞を舞う。この「恋の道」の歌も、いかにも白拍子らしい恋の歌と言えるだろう。

「ロンギ」に

いたづらに恋の奴になり果てて、亡き世なりと憂からじ

という表現がある。ここではシテの老人が恋

のために心身が疲れ果てることを、恋という主人に厳しく追い使われる奴隷に例えている。この「恋の奴」は、古くから和歌に多く詠まれてきた。『万葉集』巻十二(一九〇七番)の作者不明歌

ますらをのさとき心も今はなし

恋の奴にわれは死ぬべし

は、ふだんは判断力に優れた立派な男が、今は恋のために死にそうなほど弱ってしまったことを詠んでいる。この歌の「恋の奴」は、能「恋重荷」の場合と同じく、恋に使われる奴隷の意にも解釈できるが、和歌では「恋の奴」がそのような意味で詠まれることはほとんどない。『万葉集』巻十六(二八八六番)は、穂積親王が宴席で詠んだ歌である。

家にある櫃に鍵さし収めてし

恋の奴がつかみかかりて

この歌では「恋重荷」とは逆に、自分を主人に、恋を分別がなく意のままにならぬ奴僕に例えている。恋を櫃に収めて鍵を掛けるという発想や、つかみかかるという表現など、宴席での作らしい機智・諧謔味に富んだ歌である。この歌のように、和歌では「恋の奴」は恋を擬人化した言葉として使われるのが通例である。たとえば『千載集』雑・下(一一九二)の源俊頼の歌

慕ひ来る恋の奴の旅にても

身のくせなれや夕とどろきは

では、恋を旅先にまで付き従って来る奴に例えている。『和歌童蒙抄』(八二〇番)の作者

不明歌

こしらへてここに居よとは言へどなほ

慕ひてありく恋の奴か

も同様の発想で詠まれた歌で、作者が恋の奴に「ここに居よ」と言い聞かせている。『新撰六帖題和歌』(一二二五番)の藤原光俊の歌

捨てて来し恋の奴のしり慕ひ

取りつかれたる身をいかにせん

も同じく、捨てて来たつもりを自分を自分にとわりつく奴に例える。

このように、和歌では恋を擬人化して「恋の奴」と表現する例がほとんどである。「恋重荷」のように、自分自身を奴に例えた例としては、澄覚法親王(一一一九―八九)の『澄覚法親王集』(二〇六番)に次の歌がある(大谷節子氏「恋の奴の系譜」『世阿弥の中世』)。

人目もる心づかひに身をせめて

恋の奴となれる苦しき

「恋の奴となれる」という言い回しも和歌では他に例がない。これは前掲『散木奇歌集』の「恋の持夫となれる」に近い表現である。こうした和歌の用例を勘案すると、「恋重荷」の「恋の奴になり果てて」という表現は、かなり斬新なものであったと言えるだろう。

「恋の持夫」「恋の奴」といった言葉は、主に和歌の分野で機知に富んだユーモラスな表現として使われてきた。こうした詠諧歌的要素がふだんに織り混ぜられている点で、能「恋重荷」の大きな特徴と言えるだろう。

(国学院大学非常勤講師)